

統語的パラメタの限界と還元主義的認知観の問題点

コメントと考察

岡本 順治

Junji Okamoto, *On the Limitation of Syntactic Parameters and Some Problems of the Reductionistic View of Cognition: Comments*

The notion of parameters in Generative Grammar is examined with respect to the quantitative and qualitative limitations. It becomes clear that Principles-and-Parameters approach runs into difficulties constraining parameters to generate all types of particular languages. The source of difficulties lies in reductionistic view of cognition that no redundancy should be present in the theory, even if human information processing is full of such flexibility. Based on this view, I comment on the papers in this volume.

Keywords: parameter, reductionism, cognition, human information processing

0 . はじめに

N. Chomsky によって創始された生成文法は、その発展段階によって力点は異なるものの首尾一貫して人間の言語能力の解明を旗印に掲げてきた。言語に関する認知能力の解明を目指すという意味で、認知言語学の有力な一つの流れを作ってきたといえよう。そして、生成文法は、「統語論こそが人間が生まれつき持つ言語能力の中核をなす」という仮説に基づき、還元主義(reductionism)的方法論を基本に置いている。

本稿では、言語の認知特性を統語パラメタに還元する「原理とパラメタ理論(P&P)」の方法論の問題点を

(i) パラメタの設定時における量的・質的な困難性

(ii) 還元主義という方法論で言語研究をすることの是非

という2点から検討する。さらに、「ミニマリスト・プログラム(MP)」における転換について検討した上で、それらの問題点と関連した視点から各論文に対してのコメントを述べる。

1 . P & P アプローチにおけるパラメタの導入

Chomsky (1981)を契機に、Chomsky は「統率と束縛」(Government and Binding)を中心に据えたこの枠組みを「原理とパラメタのアプローチ」(Principles-and-Parameters Approach; P&P)と称してきた。この枠組みの特徴は、簡単に言えば、(i) 人間の言語獲得において、遺伝子情報に規定された(普遍文法(UG)で記述される)言語機能(language faculty)の存在を想定することができ、さらに(ii)「人間の言語」に共通した普遍的な少数の原理と、少数のパラメタの設定を仮定することにより個別言語の多様性を生み出せるという可能性を示唆した点にある。

このアプローチは、Baker (2001:1-18)が「コード・トーカー・パラドックス」¹⁾と呼んだパラドックスを理論的に解消することができる。たとえば日本語とナバホ語は、どちらも「人間の言語」としては共通していて、日本人であろうとナバホ語の話されている環境で育てばナバホ語を母語として獲得できるであろう。しかし、この2つの「個別言語」は明らかに大きく異なっており、大人にとって相当の努力をしなければ理解できるようにはならない。すなわち、両言語は、人間の脳内に存在する言語機能を記述した普遍文法のレベルでは共通のフォーマットに基づくが、I 言語、すなわち個別言語の核文法としては異なった形をとっていると見える。このような視点から、P&P では、さまざまな個別言語の分析が行われてきた。生成文法は、普遍的な文法原理を前提とした分析を行いながら、可変部分であるパラメタの発見を目指したと言える。

1.1. パラメタの量的問題

パラメタ (parameter, 媒介変数) とは、元来その変数の値に応じて関数の特徴を大きく変化させることのできるからくりであり、関数を用いたシミュレーションなどでよく用いられる。P&P では、UG に内蔵された可変スイッチがあり、このパラメタの値を設定することにより、さまざまな個別言語が獲得されると考えている。では、このようなパラメタは、いくつあるのだろうか？ 幼児が個別言語を獲得する際、果たしてどのようにしてこれらのパラメタの設定値を発見できるのだろうか？

世界には 6000 ~ 8000 の言語があると言われている。単純に2つの値

¹⁾ 第2次世界大戦の折、アメリカ海軍がナバホ・コード・トーカーと呼ばれる暗号部隊を組織し、ナバホ語で通信を行ったために日本軍は、その暗号文を解読できなかったという。これは、一方で英語とナバホ語の双方向のコード化が可能であったことを証明しているが、もう一方では、ナバホ語は日本語を母語とする日本軍にとって解読不可能な暗号であったことを示している。仲介していたのは、アメリカ軍に雇われた英語とナバホ語を話せる code talkers である。

をとるパラメタを仮定すると、 $2^{13}=8192$ なので、13 個のパラメタがあれば足りることになる。もし、20 個のパラメタを設定することで初めて世界の言語を記述できるとしたら、その普遍文法は $2^{20}=1,048,576$ 個の文法を生成してしまう。この過剰生成は、まさにパラメタの爆発といってもよいような事態を引き起こし、母語として言語獲得をする幼児にとって容易ならざる事態となる。²⁾

1. 2. パラメタの質的問題

パラメタの量的問題は、パラメタ間の構造とも関係している。上で述べたようなパラメタの組み合わせ数は、単純にすべてのパラメタが同等の資格で並列されている場合を想定している。Baker (2001)は、P&P におけるパラメタ設定において、少なくとも2つの点で画期的な試みである。そのひとつは、パラメタの質的問題としてこれまでほとんど考察されてこなかったパラメタ間の構造を問題にした点、もうひとつは、(部分的ではあるが)パラメタ設定によって類型論的に異なった言語がどのように区分けできるかという全体像を初めて示した点である。Baker (2001)は、パラメタが階層構造をなしていると想定し、10 個のパラメタに対して、13 種類のパラメタ値しか生成しない全体像を示した(図 1)。このパラメタの階層構造は、これまでの P&P に基づく生成文法の成果の一部であることは疑いないが、どの程度この階層構造が妥当なものかはこれからの検証を待たねばならない。

ここでは、これらのパラメタ個々の妥当性を検証することはせず、そのかわりに英語、日本語、ドイツ語がこのパラメタの階層の中でどのように位置づけられるかを見てみよう。階層の最上位に位置しているのは、抱合(Polysynthesis)パラメタで、これはいわゆる膠着語(agglutinative language)に見られるように、動詞に多くの接辞が融合していくタイプの言語か否かを示し、英語やドイツ語、それに日本語も [no] (つまりマイナス)がその値となる。主要部方向性パラメタは、随意的抱合性(optional polysynthesis)パラメタと組み合わせられ、4つの値を持つ。英語は、[first, no]であるのに対して、日本語は [last, no] の組み合わせを値としてとることから区別される。日本語は、能格性パラメタの値は[no]であり、この点でだけ異なるものに分類されるのは、グリーンランド語(Greenlandic)

²⁾ Fodor (1998)参照。

やディルバル語(Dyirbal)といった能格言語である。

さて、この Baker (2001)の表にないドイツ語はどのようなパラメタとなるであろうか？ドイツ語の主要部パラメタ³⁾は、日本語と同じように [last,no]となり、主格--対格言語であるので、能格性パラメタの値も同様に [no]となる。

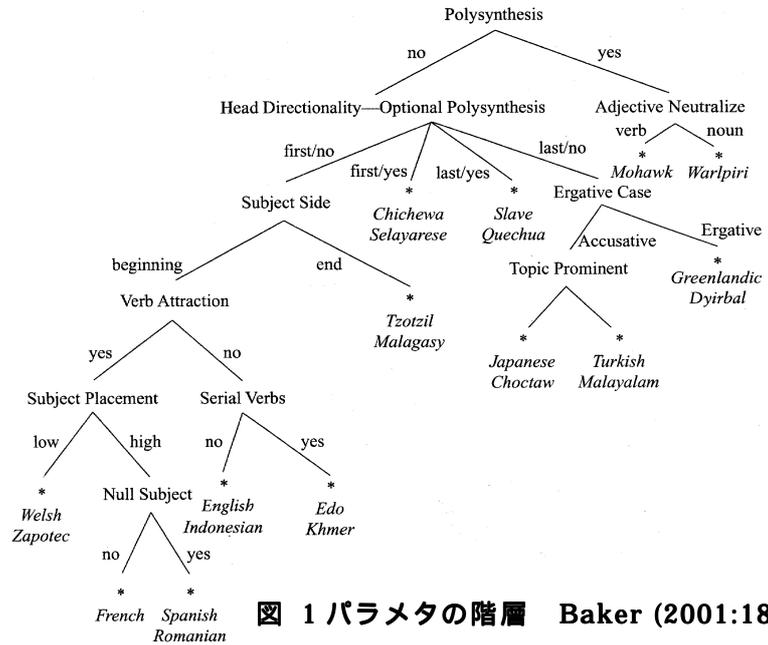


図 1 パラメタの階層 Baker (2001:183)

その下の話題卓越性(topic prominent)のパラメタこそ日本語とドイツ語の決定的なパラメタの違いであるかということ、そうではない。英語と比較してドイツ語もまたかなり話題化が自由な言語であることは間違いがないが、主語と競合して話題が先行するような現象がどれだけあるかと問われると答えに窮する。⁴⁾ドイツ語にせよ、中国語にせよ、語順に関しては一様ではなく、Baker (2001)のことは借りれば、合金に似て二種類のもものが混ざっているの、それらをどのようにパラメタで扱うかというのは大きな問題となる。

このように Baker (2001)は、確かに啓蒙書として書かれたものではあるが、そこで提示されたパラメタの階層にはまだまだ不備があると言わざるをえない。話題卓越性パラメタに関しても、日本語は [yes]英語は、[no]と説明しておきながら、パラメタ階層の中では、トルコ語やマラヤラム語(Malayalam)といった言語と対比されているところも、階層構造として疑問を感じる。

³⁾ Baker (2001:182)では、「ドイツ語や Nupe 語には、少数の主要部後置の語順があるが、その他の面では主要部先頭である。("...there are a few head-final word orders in Nupe and German, languages that are otherwise head-initial.")」としているが、これは事実誤認である。同書では、ドイツ語を主要部先頭言語に分類しているふしがあるが、そうすると英語とドイツ語が同じパラメタ設定の言語に分類されてしまう。

⁴⁾ 後述するように、吉田論文(本書)は、X パー理論の前提となる範疇素性で、主要部の素性に言及してドイツ語(・オランダ語)と日本語の区別ができることを示している。このように範疇素性を用いて、他言語の一見して複合した語順の説明がつけば、主要部パラメタの有効性はより確固としたものとなるだろう。

このようなパラメタ階層を見て疑問に思うもうひとつの点に触れておこう。それは、極めて文法的に近い関係にある複数言語をどう扱うかという点である。Baker (2001)では扱われていないが、日本語と韓国語のパラメタの違いはあるのだろうか？ ドイツ語とオランダ語の違いはどうするのか。これらの文法構造の近い言語にも、部分的には違った現象が存在するのは事実である。日本語と韓国語であれば二重対格構文、ドイツ語とオランダ語なら、従属文中の動詞定形的位置に明らかな差がある。マクロなパラメタではなく、これらの比較的マイナーな現象に関する「ミクロなパラメタ」を設定することに意味があるのか否かは、生成文法が言語獲得を究極的に説明することを目指すのなら、幼児の言語獲得のデータ、認知脳科学のデータを待つしかないであろう。あるいは一步譲って、ごく限られたマクロなパラメタだけを普遍的と位置づけ、原理とパラメタに還元できない個別言語の統語規則を認めるという道も残されている。パラメタの質的問題として、理論的に問題にされるもうひとつの側面は、何をパラメタとするのかを限定してしまおうというアプローチである。言語間の差異は、内部言語のレベルではなかったと考え、パラメタの設定によって個別言語が成立すると考えると、その差異はおもに語彙や(メンタル)レキシコンに限定できると考えられる。統語論と密接に関わる部分にさらに限定すると、それは、機能範疇(functional categories)ではないかと予想できる。この立場は、吉田論文(本書)でも支持されているが、このような考え方は理論上の要請から発したものであり、これまで発見されてきた個別言語間の統語的変異がすべて機能範疇に還元できる見通しがあるかと問われれば、そうではない。⁵⁾

2. 還元主義と認知的言語研究の関係

2.1. 還元主義による統語研究の特徴

P&P では、前節で見たように普遍原理とパラメタ設定により個別言語の獲得が説明できるという立場をとるが、その根本思想にあるのは徹底した還元主義である。逆に言うと、少数の原理とパラメタに還元できないような現象は、P&P の射程に入らない。従って、たとえ統語的な現象であっても、マイナーなものとして認識されていれば、分析の対象にならないというような事態も起こりうる。

⁵⁾ この点は、後で吉田論文に対するコメントとしてさらに議論する。

たとえば，初期の生成文法では，「ドイツ語を生成文法で分析することができるか否か」とか，「ドイツ語を生成文法で分析するとどうなるか」といった疑問に答えることにもそれなりの意味があったが，現在では，「特定の統語現象がドイツ語ではどのように現れるか」が問われ，普遍原理に基づくパラメタ研究へとつながっていくことが期待されている。そこでは，ドイツ語は世界全体の個別言語の内のひとつにしかすぎない。つまり，ドイツ語のさまざまな統語現象をいかに（説得力をもって）説明できるかという企てとは明らかに異なる。

では，生成文法の目標である人間の言語能力の解明は，今後どのような方向に進むのだろうか。Chomsky (1986), (1993)が一貫して主張しているのは，統語論の自律性と一般の認知能力とは独立した言語機能のモジュール性であり，UG に支えられた言語機能は究極的には遺伝子レベルにまで還元できるという壮大な計画である。そこでは，脳内の情報処理と遺伝子の構造という生物学および大脳生理学の研究が橋渡しをしてくれることが前提となっている。後で見るように MP では，理論内での無駄な部分をさらに削ぎ落とし徹底的な還元を目指しているように見える。

2.2. 言語獲得モデル

幼児は不完全な言語データにさらされた環境にありながら，生得的に持っている言語能力，すなわち言語機能の初期状態(S_0)からパラメタを段階ごとに設定しながら（個別言語の）成人文法に達するというシナリオである（図 2）。

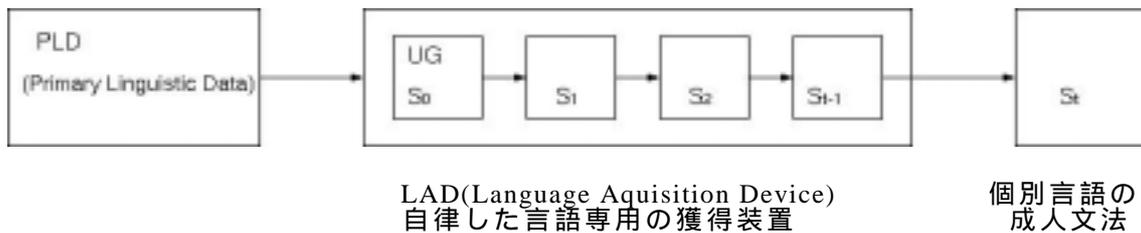


図 2 言語獲得装置

ここではまず，言語獲得時の幼児の発話からどのような実証ができるかという点に関して思考実験を行ってみよう。個別言語と I 言語の接点は，言語獲得時の幼児を対象とした実験観察である。言語獲得の初期の発話を分析することで，パラメタ値設定の様子を観察できる可能性がある。

幼児は，不完全な言語データが与えられた環境に置かれていると仮定することができる。その理由は，(i) 幼児の置かれた環境の中で耳から

統語的パラメタの限界と還元主義的認知観の問題点

脳へ入力される言語データが必ずしも文法的に信頼できる発話だけではないこと、(ii) それらの発話の中で何が正しい文であるかという手がかりが明示的に与えられていないことにある。母親の言語も、しばしば幼児に向けた特殊な形をとることが多い。⁶⁾ 音声の実体は、連続した空気の振動であり、幼児はそれらの音声の連続体を分節化(segmentation)するところから始める。分節化された音声は、音素として認識され、およそ一歳以前の幼児でもすでに母語の音素の聞き分けができると言われている。発声面でも、喃語期からだんだんと母語の音声を出す時期へと変化していく。その後、いわゆる一語文を発する時期、二語文を発する時期と変化していくが、その変化過程の発話のどの部分が I 言語のどの部分を表象しているのだろうか？ P&P の枠組みなら、どの原理(UG の生得的原理)が用いられていて、どのパラメタが設定されているのか、という問題になる。以下の2つの野村論文(本書)の例文を比較されたい。

- (1) a. mama zumachen
mom shut.INF
b. mama schenkt
mom present.FIN

Clahsen (1988)からのこのデータは、1歳10か月の幼児(Meike)の発話だが、二語文であり、文末の動詞が(1a)では不定形、(1b)では定形となっている(屈折辞 -en と -t だけの違いの)ように見える。言語データとして見る限り、これだけの情報しか与えられていない。(1a),(1b)を唯一の与えられた文字列情報として(成人文法から見て)解釈してみると、さまざまな組み合わせが考えられる。

- (1a) mama -- (i) [N, NOM] (ii) [N, ACC] (iii) [N, DAT] (iv) [N, GEN]
zumachen -- (i) [V, INF] (ii) [V, FIN(3P,pl)]
(1b) mama -- (i) [N, NOM] (ii) [N, ACC] (iii) [N, DAT] (iv) [N, GEN]
schenkt -- (i) [V, FIN(3P, sg)] (ii) [V, FIN(2P, pl)]

(1a)の語の連鎖を、屈折辞が正しいと仮定し、省略だけを認めたとして

⁶⁾ 野村(2001:132ff.)参照。

も、少なくとも(2)に挙げるような解釈ができる。

(2)	a. mama	zumachen	X
	N[NOM.3P.sg]	V[INF]	N[ACC]
	b. mama	X	zumachen
	N[NOM.3P.sg]	N[ACC]	V[INF]
	c. X	mama	zumachen
	N[NOM]	N[ACC]	V[INF or FIN?]
	d. X	mama	zumachen
	N[NOM]	N[DAT]	V[INF or FIN?]
	e. mama!	zumachen	
	N	V[INF]	

[思考実験]

(2)の組み合わせの中から、(1a)に対しては(2b)がその文法的解釈として正しいという結論はいかにして引き出されるだろうか？

Meikeがどのような意図で(1a)や(1b)の文を組み立てたのかを検証する方法は、その発話状況とイントネーションやポーズからヒントを得るしかないと思われる。(2a), (2b)は、「おかあさんが X を閉じる」、(2c)「Xがおかあさんを閉じる」、(2d)が「Xがおかあさんに閉じる」、(2e)が「おかあさん！閉めて！」⁷⁾という解釈の中からどれがMeikeの意味した解釈なのかを言い当てるのは実は簡単なことではない。大人の知識から照らし合わせて考えると(2c)はナンセンスのように感じられ、(2a),(2b)だけが選択枝と思えるが、Meikeの意図を確認するすべは状況とその解釈にしかない。(2a), (2b)と(2e)は、イントネーションやポーズの区別がある可能性がある。従って、(幼児の発話の)文法的解釈として正しいものを統語情報のみに基づいて経験科学的に証明することは困難である、というのがこの思考実験の答えとなる。

⁷⁾ これらの例で成人文法に従った語順が反映されているという保証はない。また、屈折辞がどんな文法的情報を担っているのかも本当のところは分からない。従って出現したデータを元に理論的に予測するしかないが、ここで示しているのは、二語文ではあまりにも情報が少なく、そこから背後に隠れる膨大な構造を設定するのは無理があるという点である。

2.3. 脳内の言語処理と遺伝子

言語機能が脳内で局在化している（ブローカー野，ウェルニッケ野）ことは周知の事実であるが，果たしてそれらの部位でどのように言語情報が構造化され，処理されているかは実証されていない。直接的に発話している場面から脳内の情報処理の過程を逐一観察することは，現在のところ不可能である。では，まったく実証の余地がないかと言えばそうでもない。萩原(2002:179ff.)によれば，脳の言語処理の観察を事象関連電位(Event-related Brain Potentials, ERPs)として電位差やその持続時間として捉え，特定の電位成分が脳のどの部位から来たものかを脳磁界測定法(Magnetoencephalography, MEG)でつきとめることが可能である。また，失文法患者を対象とした研究からは，語彙範疇の語彙は保持されても機能範疇の語彙が失われることが知られているが，Hagiwara (1995)は，それをMPの枠組みで考察している。すなわち，失文法患者のこのような症候のメカニズムは，(i)機能範疇は，階層上高い位置にあり，(ii)阻害されない語彙範疇は，階層上低い位置にあるため併合(merge)操作の回数の少ない(計算コストの少ない)⁸⁾ものである。上述したパラメタとの関係から見ると，機能範疇はまさに個別言語独自のパラメタにあたるのではないかとの想定があり，失文法患者の阻害された言語機能は，パラメタの設定部分ということになるが，それが果たしてどのような意味あいを持つのかは今後の研究を待たねばならない。

脳内の言語処理に関して生成文法で仮定しているモデルは，冗長性(redundancy)のない計算モデルである。これは，還元主義に基づく理論の当然の帰結であるが，複数の原理で単一の現象が説明できるような場合は，その原理自体に不備があると見なし，より単純な説明のできる原理が追求される。しかし，脳の情報処理全体像からすると，逆に冗長性のある情報処理が行われているという仮説が注目を浴びている。

大脳皮質にはおよそ100億のニューロンが存在し，それらのニューロンはシナプスを介して信号の送受を行っている。成長した人間の脳の回路網には，およそ 10^{15} にもおよぶ接合箇所があると推定されているが，遺伝子を構成する塩基配列はおよそ 10^9 の組み合わせしかない。これは，

⁸⁾ 併合は計算コストがかからないという仮定があるが，実際の言語処理プロセスを問題にする限り，あらゆる操作にコストはかかる。

遺伝子情報からだけではすべてのシナプス結合を作り出すことができないことを示唆している。脳内で情報がどのように表現されているかに関しては、「単一ニューロン仮説」が一時期注目されたが、単一のニューロンが特定の情報だけを表わしているとは考えにくい。むしろ、複数のニューロンがいくつもの回路を形成し、集合体を成して情報処理をしていると考える方が自然である。Donald O. Hebb がかつて提唱した「セル・アッセンブリ」(cell assembly)の仮説は、まさにこのような考え方に基づいている。この仮説によれば、セル・アッセンブリを構成する個々のニューロンは異なったセル・アッセンブリ間で部分的に重複しており、ニューロン間の機能的結合は、表現する情報の種類に応じて変化することになる。(櫻井 2002:100) この考え方は、目下検証されている最中であるが、脳の情報処理を単純な還元主義では説明できないという立場を鮮明に打ち出したものであると言える。

生成文法の立場に戻って考えると、言語機能を普遍文法とパラメタに還元することは、脳の情報処理と無関係ではありえない。遺伝子レベルまで言語能力が遡って説明できるはずだという信念は、コンピュータ言語Cで書かれたアルゴリズムを、2進数に還元して解読しようとするほどの無理がある。人間のDNA配列を解読し、特定の遺伝子がどのような働きをしているかを解明する試みが現在進行中であるが、脳の高次の情報処理に関しては、単一の遺伝子とその機能を実現しているとは考えにくい。(榊 2001: 183ff.) 現在の生成文法の方法論に対しての懐疑を言い換えると、言語能力を物理的実体と計算に還元することは、たとえ可能であっても言語の普遍的特徴を有意義に説明することにはつながらないのではないか。では、普遍文法を求める研究は、どのような方策をとればよいのだろうか。それは、還元主義を途中で放棄し、適切なレベルで冗長性のある理論を作ることだと考えられる。

3. 個々の発表論文に対するコメント

吉田論文(「ドイツ語の語順に関するパラメタ再考」)では、P&Pにおけるパラメタ設定の一般的困難さを再確認しつつも、UGのパラメタをレキシコン内の機能範疇クラスに制限することで回避できるとの認識からスタートする。Xバー理論を堅持しつつ、ドイツ語のパラメタ値として、P1からP5までのパラメタが導入されるが、P2がP1に対してのドイツ語のパラメタ値(i)[+V]素性の時は主要部後続、(ii)[-V]素性のN,P

は主要部先行)であるので、合計4つのパラメタがドイツ語の語順に関与していることを主張している。しかし自身で認めるように P2 (主要部方向性)、P3 (格付与する主要部)は機能範疇とは言いがたい。ここでは、ドイツ語の語順に焦点をあてているわけだが、個別言語の語順がすべてパラメタで決定されているとも思えない。語用論や文体レベルで決まる語順も常識的に考えてあるだろう。

一方で Kayne (1994)が LCA で示した、すべての言語を、指定部-主要部-補部語順をとる SVO 構造から導く方式は、ドイツ語を扱う場合、動機づけられていない移動(目的語、副詞や二次述語の左への移動)を仮定する必要が出てきて好ましくないと、吉田論文は主張する。そして幼児のドイツ語の SOV 語順は説明できないとしているが、それは必ずしもそうではない。つまり、幼児が二語文を発する段階で OV の語順が多く観察できるからといって、それがドイツ語のパラメタ設定の前の段階を示すという保証はないからである。二語文を発する時には、すでに主要部方向性パラメタは設定されてしまっているかもしれない。幼児が発話前に、かなりの言語獲得をすでに終えている可能性は高いと思われる。では、LCA が正しいのかと問われれば、Haider (2000)のように SOV を基底語順とする立場と同様に、還元度が高いという点で、生成文法の方法論上(制約が厳しい分だけ)好ましいと言えるが、それは還元主義を無条件に肯定した場合の話である。MP のように、X バー理論を放棄して語順問題を統語論から排除してしまえば、主要部方向性パラメタの知見は維持できなくなる。MP は、さらに細かい単位を局所的に扱う方向へと進むことになり、素性や形態素レベルを重視するところまで来ているが、吉田論文は P&P にとどまることで語順を統語論の問題として扱うことの正当性を主張しており、LCA を機能範疇に限ることで P4 のパラメタが不要になる可能性を示唆している。

田中論文(「ドイツ語の分離話題化構文：コピー・削除アプローチと出力最適性」)は、ドイツ語の分離話題化という現象を統語的、形態的、音韻的側面からその生成プロセスを分析したものである。分析は、従来の生成文法でありがちな「移動」vs.「基底生成」という2項対立から出発するものの、どちらの分析も欠陥があることを指摘した後、(i)左セグメントと右セグメントの音韻的・形態的な不整合、(ii)部分的に成立している島の制約に注目する。Chomsky (1995)で提案された「コピー&削除」アプローチをとることによって統語的派生を説明し、左右のセグメント

の形態的不整合を DP-Fähigkeit という制約から説明する。田中論文は、統語的派生のみに注目するものではなく、形態論や形態論から音韻論へ至る過程でかかる制約を考慮することで分離話題化を扱っている点で、これからの生成文法に基づく個別言語分析に対してのひとつのアプローチのあり方を提示しているように思える。

分離話題化構文も、ドイツ語という個別言語にのみ観察される訳ではないという点で、他言語での検証が必要となるが、話題化を構造的な位置でマークする言語にとって、 $[\pm V/2]$ がパラメタとして働くという仮説は興味深い。しかし、一方では、日本語のように構造的な位置というより、助詞で話題をマークする場合は別の話になる。同じ「分離話題化構文」という名前で共通に示されているような現象でも、関与しているパラメタが違っていると主張することになる。

稲葉論文（「ドイツ語における外置と句構造」）は、動詞の補部ならびに関係節が「後域」に現れる場合、これを移動と見るか基底生成と見るかを扱ったものである。動詞の補部の場合は基底生成、関係節は移動（外置）として扱うべきだと主張するが、関係節の扱いに関しては、英語のように LF（論理形式）で解釈される意味に影響を与えうる統語的操作とは違い、ドイツ語の場合は、LF における解釈に影響を与えない文体的操作（移動）であり、PF で処理すべきであるとする。従来、ドイツ語の「外置」として同等に扱われた 2 つの現象の違いを経験的データを用いて指摘するとともに、違うレベルで取り扱うことを提案している。しかし、PF での移動をどのように特徴づけたらよいのだろうか。ひとつの解釈としては、統語論内の移動操作とは異なり、PF での移動は LF の解釈とは関係ないものであり、個別言語に固有な移動であるという立場⁹⁾である。稲葉論文では、(i)最も近い文域の境界へ移動する、(ii)（意味的に先行詞となる）他の名詞句を越えてはならない、という 2 つの制約を提案しているが、これは、一方では文域というドイツ語学での概念に依存しており、他方では名詞句の意味に依存している。このような制約が果たしてどこまで説明力を持つのが問われることとなるだろう。

野村論文（「 v P ステージと素性照合：L1 獲得の観点から」）は、幼児のドイツ語獲得過程で見られる「不定詞の任意出現ステージ(OIS)」の統語構造を扱ったもので、軽動詞 v の素性の強弱がパラメタとなっている

⁹⁾ 例えば、Chomsky (1999) の PF での移動に関する外池 (2002) の批判を参照。

可能性を示唆している。Wexler (1998)によると OIS は、フランス語やオランダ語でも観察される段階（ステージ）であり、特定の言語にのみ観察されるものではない。野村論文は、Wexler の OIS に対しての仮説（言語獲得の一時期において「照合唯一性制約(UCC)」が成り立つ）を検討し、(i) 幼児の言語ではデフォルト格の属格主語が出現する説明ができない、(ii) V-final の時 $V[\pm \text{finite}]$ が混在し、 V_2 では高い割合で $V[+\text{finite}]$ となる理由が説明できない、(iii) 機能範疇 AGR が経験的に正当化できない、との理由で退ける。野村論文が対案として提示するのは、VP 内主語仮説にのっとった vP シェルであり、OIS の説明として、3つの相(phase)を想定する。第1期相は、一致も時制も観察されない段階、第2期相は、 vP は投射されているが TP 投射が未獲得の段階、第3期相は、TP 投射まで獲得された段階とする（初期文法における vP ステージ分析、 $vPSA$ ）。このモデルに従えば、上述の(i)の問題は主語が vP の指定部にとどまり TP が投射していないことで説明でき、(ii)は、機能範疇 v に強弱の素性（ $[sF]$ あるいは $[wF]$ ）を与え、この素性の照合を行うことを前提とすれば、屈折接尾辞の認識がパラメタ値設定のトリガー(trigger)として機能しうると説明している。野村論文は、このように OIS に対して獲得の3段階を想定することにより、説明力の高い枠組みを提供している。しかし、2節で見たように、そもそも二語文、三語文にそれほど豊かな構造を想定していいものかどうか、という疑問は残る。さらに、小さな形態素がトリガーとなって、 v の素性の強弱を照合することで統語構造が決まっていくという仕組み自体は理解できるものの、ここでの素性の実体は何なのか、素性の強弱というメタな操作をどこまで許容するのかは不明である。MP のように高度に素性に依存したシステムを形式的に組み上げていくためには、今後、素性の体系を形式言語として統語的、意味的に整備していくことが必要になるだろう。

4. まとめ

本稿では、生成文法の P&P アプローチにおけるパラメタの概念とその量的、質的な制限の必要性について論じ、生成文法の一貫して主張してきた言語獲得のメカニズムの限界が、その徹底した還元主義的方法論にあると主張した。しかし、この批判は、生成文法を全面的に批判するために書かれたものではなく、むしろこれまでの成果を放棄するのではなく堅持しつつ、新たな言語研究へと向かうべきだとの認識から発したも

のである。本稿で取りあげた論文は、いずれもドイツ語の語順に関連した研究であり、それぞれ普遍文法やパラメタとの関係だけでなく、個別言語としての特色にも関連していると思われる。普遍と個別が今後も共存できるような生成文法理論の発展を期待したい。

参考文献

- Baker, M. C. (2001) *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar*. New York: Basic Books. (郡司隆男訳、「言語のレシピ：多様性にひそむ普遍性をもとめて」岩波書店, 2003)
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. New York: Praeger.
- Chomsky, N. (1993) *Language and Thought*. Wakefield: Moyer Bell.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1999) *Derivation by Phase*. MIT Occasional Papers in Linguistics, No.18. Cambridge, Mass.: MIT.
- Fodor, J. D. (1998) “Unambiguous triggers.” In: *Linguistic Inquiry* 29, 1-37.
- Hagiwara, H.(1995) “The breakdown of functional categories and the economy of derivation.” *Brain and Language* 50:92-116.
- 萩原 裕子 (2002) 「脳科学と日本語研究」『日本の言語学：30年の歩みと今世紀の展望』大修館, 176-184.
- Haider,H. (2000) “OV is more basic than VO.” In: Svenonius (ed.), 45-67.
- Kayne, R. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 野村 泰幸 (2001) 「ことばの獲得：幼児の文法から成人の文法へ」吉田・保阪・岡本・野村・小川 『現代ドイツ言語学入門』大修館書店, 131-164.
- 榊 佳之 (2001) 『ヒトゲノム：解読から応用・人間理解へ』岩波書店.
- 櫻井 芳雄 (2002) 『考える細胞ニューロン：脳と心をつくる柔らかい回路網』講談社.
- Svenonius, P.(ed.) (2000) *The Derivation of VO and OV*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamin.
- 外池 滋生 (2002) 「Chomsky (2001)における2つの問題：『音韻部門の移動規則』とEPP素性」『英語青年』 Vol.CXLVIII, No.5, 15-18,49.
- Wexler, K.(1998) “Very early parameter setting and the unique checking constraint: a new explanation of the optional infinitive stage.” In: *Lingua* 106, 23-79.